［2021 海女研究集会－国境を越える海藻の流通と文化－　於：海の博物館］

「海藻文化の総合研究に向けて」　2021/12/18　塚本明（三重大学人文学部・歴史学）

はじめに－これまでの経緯－

◇昨年度の海女研究集会：「各地の海女と海藻漁」をテーマに開催。

　鳥羽志摩、伊豆、台湾の海藻漁の比較。＊海女漁の地域性、広域的広がりへの関心。

⇒海藻ゆえの問題を、総合的にとらえる必要。生産から流通、文化基盤の問題へ（今回）。

◇学際的な海藻文化の総合研究の構想

【19 世紀以降の東アジア世界における海藻の生産・流通・消費に関する総合研究】

・ローカル生産形態の多様性とグローバル経済との連鎖。

・生産から加工・流通、消費までの全過程を射程。

・フィールドワークと文献研究の融合（学際研究）。

・絶えざる情報発信。最終的に成果シンポジウム、論文集刊行を計画。

◇伝統的海女漁における海藻の規模の大きさ（構想の前提。先志摩・越賀村の事例）

・文化 3（1806）年、越賀村のテングサ出荷量：年間 6000 俵（約 150 トン）。

・文久 2（1862）年 4 月、先志摩半島への寄草（テングサ）。4920 貫匁、金 530 両売上。

　明治 21（1888）年の「海陸売上げ高」のうち 8 割以上がテングサ。

一、東アジアと海藻

・海女の移動

　近世段階では志摩から熊野灘、伊豆、房総半島へ。

　19C 末以降、海藻を求め一気に広域化。北海道から八重山まで。朝鮮半島へも進出。

　→それに刺激され、済州島海女が朝鮮半島へ進出・定着。台湾・中国南岸へも？

＊各地に海女漁の拡大・定着。広域的出稼ぎ：商業資本の介入、移動を伴う。

・テングサ・寒天の流通

　各地からテングサ、そして加工された寒天が大阪市場へ集積、長崎を経て中国へ。

　朝鮮半島、また台湾、中国からもテングサ原草が日本へ、寒天加工後、中国へ？

　中国からヨーロッパへも輸出（細菌培養土、他）…？

　北方領土での海藻：樺太からテングサ輸出？　コンブ生産をめぐる中国と長崎。

※近代東アジアで、海藻をめぐるグローバルな構造転換が発生。

二、19 世紀「テングサバブル」による構造変化

《未利用・低利用であった産物（＝海藻）が、高度に商品化、高価値化することにより、生産構造が各地で劇的、かつ連鎖的に変化》

・グローバルな流通構造に組み込まれるローカル生産地。

　海女漁の専業化。小規模多様性から大規模単純化へ。

［鳥羽・志摩］従来放置されていた海藻の商品化（肥料利用の変容？　済州島等も？）

［朝鮮半島］志摩海女の出稼ぎ。未利用の海藻採取⇒済州島海女の半島進出・定着。

［中国～ヨーロッパ］ほぼ未利用資源。

・海藻「消費」の発展：伝統食、救荒食物、肥料利用から、菓子などの奢侈的利用へ。

　食物以外の工業的な活用も発展・増大。

【生産から消費までの全構造把握】
［生産（海藻漁）］：海女漁における高い比重（特に19C以降）。共同体規制の強さ。
　磯売。広域的出稼ぎ。海と山の有機的連関。
［加工・流通］：乾燥保存と取引。遠隔地商人と大規模な先貸し取引。テングサと寒天。
［消費］：前近代の大量消費。救荒作物（栄養価高）。工業加工に伴う活用。

三、総合研究の諸課題
［生産］
・漁の諸形態：潜水漁／岩場で取る／寄草（流れ草）／／刈り取る／摘み取る／拾う。
・高価値化した前後での漁業形態の変化。無条件参入→入漁権→磯売？
・潜水（海藻）漁の広域化と各地間の関係（技術、人、モノの移動）。
・コモンズ意識の諸相（海藻・漁形態による違い）・時期的変化。
・漁の形態による権利。「寄草」の取得と収益の分配。
［加工・流通］
・大阪海産物商人の実態。加工・消費地へのルート。
・朝鮮半島、中国、ヨーロッパ間の海藻流通の実態。
・近代国家の外交・経済政策の影響。
・運送手段：舟運とモータリゼーション。
・加工の担い手。生産と加工の分離過程。
［消費］
・身近に存在した未知の食材の「発見」。
・新たな食文化。食のグローバル化、近代化？　それに伴う海藻の表象変化。
・伝統的肥料利用の変化。肥料に用いる海藻の種類（違い）。
・工業的利用の多様性。糊、凝固剤、ヨード、培養土・培養液、建築素材…。
・従来用いられた何らかの素材の代替か、新たな需要創出か。
＊各過程間の相互作用・連鎖構造。
・加工・流通が生産構造に与えた影響。
・消費の発展が加工・流通を変容。
・産地の変化、生産地での消費変動。
⇒歴史学、社会学・人類学・民俗学、水産研究の各分野による、真の学際研究へ。

四、基盤となる海の博物館との連携
海の博物館：「海民」の活動をテーマとする博物館。
＊単なる資料展示施設ではない。海を守り、海の文化を調査研究する拠点。
初代館長・石原円吉：志摩・和具の網元の長男。水産事業家、県会議員、代議士に。
　水産資源保護法（1951年）発案、水産庁や水産試験場設立に尽力。
1953年、私財を投じ東海水産科学協会設立。漁業振興調査研究と漁業青年教育を目的。
1971年12月7日（94歳誕生日）、海の博物館開館。＊今年12月で50周年。
石原円吉編「長寿と短命」（1972年正月？）。
　近藤正二「日本の長寿村・短命村」を抜粋。「附言」として、自身の食生活を紹介。
　　朝食に若布其他の海藻貝類入り味噌汁。夕食にも海藻。＋ビール一杯！
　「海藻喰って　皺をのばして九十五歳」（翌月？の2月に逝去）